

魔女と王様

とつても小さな九つの国——3

あわなみりようさく

3 笑い声は春の空に

ローズンの後をふわりと引つ張られて行く間に、ニーダマの体はすっかり乾いていました。でも、冷え切った体の熱は戻っていませんし、くじいた足首はひどく腫れていました。右目のまぶたも腫れ上がったままで、どうしてか、両眼ともに開けることができないようでした。

ローズンはとつておきのお客さまのために手入れされた小さな部屋で、暖かなベッドにニーダマを寝かせてそつと毛布を掛けると、ちらちらと燃える暖炉に薪をくべに行こうとしました。

「ありがとう……」

ニーダマの弱々しい声が聞こえたのと同時に、その手が毛布の外へ伸び、ローズンのドレスの裾をつかみました。でも、手にはあまり力が入らなくて、そのままだらりと下に垂れてしまったのです。

「まあ……」

ローズンはほつとしたようなびっくりしたような表情を浮かべて振り向くと、その冷たい手を持ち上げて、そつと包みました。

その瞬間でした。ローズンがニーダマに恋をしてしまったのは。そして、眼を閉じたままのニーダマがローズンと恋に落ちてしまったのは——。

でも、まだ二人はお互いの気持ちを知りません。だってニーダマは、そのまま幸せそうな笑みを浮かべて眠ってしまったのですから。

次の日の朝早く、ローズンは温かいスープを手に、ニーダマの眠る部屋を訪れました。ローズンがベッドに面した小さな木窓を開け放つと、森の木々の柔らかな香りがニーダマの鼻をくすぐりました。

「私と結婚してくれませんか？」

目覚めたニーダマは、自分が何を言っているのかも気づかぬうちに、こう言っていました。左目を半分だけ開けて。

「まあ！」

ローズンは真つ白な頬を赤らめてスープのお皿をごとりと置きました。その眼は、じつとニーダマの黒い瞳を見つめています。

「あなたは、『まあ』しか言わないのですね」

「まあ！」

そう言ってしまったから、ローズンは大きな声を上げて笑ってしまいました。それにつられて、ニーダマも朗らかに笑います。その声は、開け放たれた窓から春の爽やかな朝空に気持ちよく響きます。

こんなに屈託なく笑うことは二人とも滅多にはありませんでしたから、二人がとっても楽しい気持ちになったのは窓の外にいるフォルウの目から見ても明らかなことでした。

「温かいスープを、お飲みになってくださいな」

笑いが収まると、ローズンがまろやかな声で言いました。ローズンは、自分の声がまとう柔らかな優しさに、自分でもちょっぴりビックリしてしまったのですよ。だって、ローズンは北の魔女。自分がまるで、南の魔女になったような気がしたんですもの。

「なあんだ、やっぱりちゃんと喋れるんですね！ 安心しましたよ、お嬢さん」

「まあ！」

ローズンはお嬢さんだなんて呼ばれてびっくりして、ついまた『まあ！』なんて言ってしまった。けれどもニーダマは笑わず、真剣な眼差しでローズンの瞳を見つめると、再び言いました。

「ねえ、お返事を聞かせてくれませんか？ 私はあなたと、結婚したいのです！」

〈つづく〉